

〔研究論文〕

## 沖縄の民話における「異人」と「多文化共生」 －日本社会における多文化共生教育への示唆

孫 美幸

〔Article〕

### “Foreigners” and “Multicultural Coexistence” in Okinawan Folktales : Considering Multicultural Education in Japanese Society

Mihaeng SOHN

#### Abstract

In this paper, based on the concept that connects the perspectives of “multicultural coexistence” and “life” in the traditional Japanese thought, I examined how it was expressed in Okinawan folktales, especially focusing on “foreigners”. I also suggested some points for multicultural education in Japanese society. In Okinawan folktales, there was some hope to live with “foreigners” in the way of depicting the relationship between humans and “foreigners” based on “suffering together”. In order to establish a long-term relationship to live together, it became clear that “crying” and “laughing” were used as a way of releasing from “suffering” in Okinawan folktales. In the present practices of multicultural education, it is important to first regain the sense of “suffering together” and to think specifically about how each person can regain the sense in the context of each region. Moreover, the most important thing is how to release the “suffering” and help the circulation in order to create a long-term relationship to live together with “foreigners”. At the same time, it is also meaningful to make use of external power in multicultural education. For example, the three viewpoints of “life” were deeply related to creating the internal culture of peace and global peace in the implementation of multicultural education. I gave specific examples of practical methods such as “slow breathing”, “touching”, “releasing the body”, etc. in “your own body”, one of the themes of “life”. By incorporating such specific examples in a way that suit the circumstances of each region, I believe that it will become more sustainable multicultural education programs.

#### 1. はじめに

筆者はこれまで日本と韓国における包括的な平和教育を発展させることをテーマに研究を進め、包括的な平和教育の一領域としての多文化共生教育と「いのち」の視点を結ぶことの必要性や、どのように両者を関連づけられるかについて整理してきた<sup>1</sup>。そして、日本と韓国で育まれてきた思想の中で、「多文化共生」と「いのち」の視点を結ぶという考え方がどのように位置づけられるのかを、これまでの論考で検討してきた<sup>2</sup>。本論では、古代から多民族との交流がさかんであった日本の沖縄諸島の民話に着目してさらなる考察を深める。

沖縄諸島の伝統的な思想や民話をあげながら、多文化共生社会や教育のあり方について検討する

先行研究は見当たらない。他地域であれば、これまでの論考で述べた通り、少数であるが存在する。これまでの論考で述べた事例を以下再掲する。佐藤弘夫(2014)は日本列島における「神・人・死者」の関係性について言及し、前近代社会では「神・仏・死者・先祖などの不可視の存在＝カミ」をすべて含めた形で、この世界が成り立っており、これらの「カミ」が「公共空間を生み出す機能」や「人間・集団間の緩衝剤」の役割を担っていた。つまり、「民族や人種を超えたカミ」に包み込まれているという安心感が、「ナショナリズムや選民意識の肥大化の抑制」につながっていたという日本列島における「多文化共生」の伝統について言及した<sup>3</sup>。

また、直接「多文化共生」という言葉は出てきていないが、人間と自然の共生について述べた研究もある。例えば、金容儀(2014)は、『遠野物語』における人間と妖怪の関係性について、「妖怪は遠野という共同体に活力をもたらす存在」とし、「絶えず妖怪との共生を計っていた」と、エコロジーの観点から人間と自然の共生の事例として論を展開した<sup>4</sup>。

しかし、民話を使って直接的に「多文化共生」と「いのち」の視点をつなげて言及し、日本における多文化共生教育の方向性について考察している先行研究は、沖縄諸島のものも含めてほぼ見当たらない。長年、民衆の間で伝えられてきている民話には、文化的重層性の中で育まれてきた他地域とのつながり、独自の思想、そして共に支え合い平和に生きるためのヒントが詰め込まれている。近年、日本でもこのような民話に着目して、今後の社会のあり方を考えていくという研究が、文化人類学や民俗学を中心に進んできている。例えば、3.11後の東北社会の復興に必要な視点や思想のヒントが、柳田国男の『遠野物語』やその他の著作に現れており、もう一度詳細にテキストを読み込んでいくことの重要性が指摘されている<sup>5</sup>。日本における「多文化共生」や「いのち」の視点について民話を使って考察することも、上記のような流れの中で必須であると考えている。

本論は、これまで検討してきた日本の伝統的な思想の中での「多文化共生」と「いのち」の視点とをつなぐ考え方に対する位置づけをもとにして、その考え方が長年民衆の間に伝えられてきた民話や伝説の中にどのように表出しているのかを、沖縄諸島における民話に登場する「異人」を対象にして考察するものである。このように「多文化共生」と「いのち」の視点をつなぐといった新しい切り口から、日本の伝統的な思想やその表出の仕方について、古代から多民族との交流が盛んな沖縄諸島の視点も含めて検討することは、それぞれの地域に合った形の多文化共生教育のあり方に示唆を与えるものとなるだろう。

## 2. 研究方法

本論での研究方法は、これまでの論考と同様に、民俗学で行われてきた民話研究の方法論を活用し、多文化共生教育に示唆できることを考察するものである。この研究方法の背景について本論で再確認するため、これまでの論考での説明を以下再掲する。民俗学では、民話に民俗学的事実が秘められていると考えられており、日本では昭和初期柳田国男によって提唱された。中尾聡史ら(2016)は、「民俗事象によって歴史過程を解明することで、現実問題の解決に役立てる、という実践政策学的な目的を民俗学という学問の目的として定位していた点に、柳田が提唱した民俗学の本質」を見ている。今日のある事象について、民話の分析を行う民俗学的調査を通して、日本における社会的認識の根底の一端を探ることの意義を説明している<sup>6</sup>。学問の枠を越えて、このような民俗学的調査方法を活用した研究が昨今増えてきており<sup>7</sup>、本論についても同様の視座をもっていると言えるだろう。また、教育学に目を向けると、近年の研究動向として、「先住民環境教育

(indigenous environmental education)や場の教育(place-based education)、植民地問題を中心におく土地の教育(land education)など、近代教育学を支える西欧の世界観とは異なる知の体系や知の獲得方法を扱う研究が伸長している」ことも指摘されている<sup>8</sup>。このような傾向は、ある時代、ある地域の生活文化に深く根差した民話を通して教育を考えるという本論の立場と通底している。本論ではこのような立場から、日本における多文化共生教育について考察していく。

なお、本論で扱う日本の伝統的な思想については、これまでの論考でも述べた通り、上田正昭が述べる「万有生命信仰」と「共生み」の解釈を参考にする。上田は、日本神話の原像を丁寧に考察し、日本文化の源流や古層について言及してきた代表的な研究者である。これまでの研究方法に関して重視してきた3つの視点について次の通り述べている。

「まず、第一に記録された神話をなるべく多く蒐集して、記録者によって追加されたり、潤色されたり、作為された箇所があるかをみきわめる作業が必要です。そして第二に、日本の民間伝承、とりわけ昔話や伝説、あるいは民間の祭事や芸能などとの類似性をみいだして、その伝承がいつごろまでさかのぼりうるかを究明することです。そして、考古学の発掘成果と対比することも不可欠となります。第三は、日本列島の神話と近隣の諸地域・諸民族との比較です。(中略)受容された神話ないし神話的要素が、どのように変化していったのかという、文化受容のありようも軽視するわけにはまいりません。ルーツ論とあわせてルート論、すなわち形成のプロセスや変貌の過程を考察することが不可欠になります。<sup>9</sup>」

筆者は、記録の客観性を多様な資料によって担保しようとしている姿勢はもちろん、近隣諸国との比較において文化受容のプロセスを考察することが、異民族との「多文化共生」や「いのち」のあり様を考える上で大変重要であり、偏ったナショナリズムに陥ることなく、これまでの論考と同様に本論を展開できると判断した。

また、分析対象である沖縄諸島の民話は、『日本昔話通観』『沖縄の民話<sup>10</sup>』などの代表的な民話集から、長年に渡って沖縄諸島の民話研究を意図的に行ってきた福田晃、丸山顕徳などの研究者が採集したもの<sup>11</sup>等を対象にした。

そして、長年日本の民衆の間に伝えられてきた民話や伝説の中で、「多文化共生」や「いのち」の視点がどのように表出しているのか検討する際、その中に登場する「異人」に着目したい<sup>12</sup>。「異人」の背景についても確認のため、これまでの論考での説明を以下再掲する。小松和彦(1995)によれば、「異人」は、「民俗社会にとっての「他者」」であり、「現象学的にみれば、「他者」は「われわれ」に排除された者として人間の意識のさまざまな位相に現れる」という<sup>13</sup>。つまり、民話に現れる「異人」は、社会から排除され、逸脱する存在として、社会の内と外を漂流するような境界性を帯びていると言える。赤坂憲雄(1992)は、レヴィ・ストロースの『人種と歴史』の記述を引用しながら、「たがいに共有できる価値規範の欠如した人々(文化)を、野獣(非人間・非文化)のカテゴリーにくくすることで、全面的に排斥しようとする態度は、古来より決して珍しいものではない」とし、人喰い族の神話を説明する<sup>14</sup>。このように、民話に現れる「異人」の存在は、その社会がどのような包摂と排除の原理を構成しているのかわいていく上でのキーパーソンとなることは間違いない。赤坂は、「異人」のカテゴリーについて、次の6種類をあげる。①一時的に交渉をもつ漂泊民、②定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる来訪者、③永続的な定着を志向する移住者、④秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン、⑤外なる世界からの帰郷者、⑥境外の民としてのバルバロス<sup>15</sup>。本稿では、

異民族との多文化共生や差別と排除の問題に関わる点を考慮し、⑥境外の民としてのバルバロス<sup>16</sup>としての「異人」を主な分析対象とする。バルバロスは、「未開」という意味の *barbare* (バルバール) からきており、古代ギリシア人が辺境諸国の人々を一括してそのように呼称した。動物に類似した不可解な言葉を使う存在であると捉えられた<sup>17</sup>。異民族との多文化共生を考える際には、このような歴史背景のあるバルバロスに着目することが重要であると考えた。

### 3. 「異人」たちの語られ方 ～「多文化共生」と「いのち」の視点からの考察

#### (1) 「万有生命信仰」と「共生み」に見る「多文化共生」と「いのち」の視点

本節はこれまでの論考で確認した内容であるが、本論にとっても重要な位置づけであるので、以下再掲する。上田正昭(2013)は、日本人の神の観念は「万有生命信仰」に基づくとし、「天台本覚思想」を表す「草木国土悉皆成仏<sup>18</sup>」と同様に、全てのものに神を認める、汎神教であると述べている<sup>19</sup>。例えば、本居宣長の『古事記伝』三之巻の中の一節には、「又人はさらに云ず、鳥獸木草のたぐい海山など、そのよ其奈何にまれ、よのつね尋常ならずすぐれたる徳のありて、かしこ可畏き物をかみ迦微とは云なり(鳥であっても、獣であっても、草木の類であっても、世の常ならずすぐれて徳があつてかしこきものは、すべて神さまである)」と記されており<sup>20</sup>、人間だけではなく、全てのものに「いのち」を見る思想と言える。

上記のような思想のもと、日本における「鎮守の森」のあり方から、「自然と人間の共生の場が古くからあったこと、そして、人間相互の自治の場であったこと」を指摘し、人権と環境の問題が不可分であることを述べている。つまり、「人間のいのちの安全は、自然の保全なくしてはあり得ない」という考え方である<sup>21</sup>。そして、このような考え方の背景には、『古事記』の中で記されている「共生」の読み方、「ともうみ」があるとしている<sup>22</sup>。つまり、「異民族・異文化と日本人・日本文化が、未来に向ってあらたな歴史と文化を共に生みだす、人間がいかに努力して、新しい自然との関係を創造してゆくか」が、『古事記』の中の「共生み」に根差す考え方であることを指摘した<sup>23</sup>。

以上のような思想は、異民族や異文化との共生のあり方、まさに「多文化共生」の考え方につながる部分である。日本においては特に「万有生命信仰」、全ての自然の中に神がいるという考え方、つまり自然の中で生きる人間同士の対話のあり方が大切であり、自然と調和した平和な未来を共に生みだす関係を築くことが重要<sup>24</sup>であることを物語っている。

日本における「万有生命信仰」と「共生み」の考え方は、人間のみならず自然も含めた全ての「いのち」のつながりに着目し、様々な文化背景をもった人間同士が対話し、自然と調和した平和な未来を創造していくという、「多文化共生」と「いのち」のあり方が示されていた。

#### (2) 民話の中の異人たち～共苦の底からの解放の術

沖縄諸島の民話においても、東北地方の民話集『聴耳草子』と同様に、バルバロスたちが出てくる各話において、登場する人間や動物、妖怪たちの生と死という問題が多く描かれている。どのような場面で、登場人物たちは生と死の問題に直面し、その中でバルバロスはどのような役割を果たしているのか整理する。

表：代表的な生と死の場面の描かれ方とバルバロスの役割の例

(『沖縄の民話』より抜粋)

	登場する バルバロス	登場した場所	説話のタイトル (採取された場所・ページ)
		バルバロスの役割	説話の中の生と死
1	千鳥	海岸・磯辺の岩	千鳥の歌 (沖縄本島・pp.28-32)
		助けてもらった恩返しに、満久(まんくう)の世話、炊事洗濯を行う。	一人息子次良(じら一)の死をきっかけに千鳥と出会う。千鳥が去った後、満久が熱発して死ぬ。
2	月	海岸	アカナーの話 (沖縄本島・pp.33-36)
		月の世界で暮らせるようにかごでアカナーを引き上げる。	猿が山刀を振り廻して、あやまって自分の首を切り落として死んでしまう。
3	鬼	海岸の珊瑚礁の岩穴	鬼餅 (沖縄本島・pp.60-64)
		牛や馬を盗んだり、人間までさらって食ってしまう。	鬼はびっくりして、飛びあがった瞬間、足をすべらして、怒涛にころげ落ちて死んでしまう。
4	棺桶をかついで 鉄をぶらさげた男	首里城の坂	宝の箱 (沖縄本島・pp.65-67)
		墓地まで棺桶を運び、土を掘る。	棺桶に黄金がぎっしりとつまっており、その黄金を人々に配ってやると、みんなゆたかになり、盗みをしたり、人殺しをするようなことはなくなった。
5	白髪の老人	首里の金城の坂	おほん坂 (沖縄本島・pp.75-78)
		杖にすがって、しきりにせきをしながら、苦しそうに坂を登る。	主人公山城松吉の父は、幼い時に人に殺された。父の仇を討つために犯人を探していた。
6	美しい女 (竜宮の乙姫)	砂浜、海岸	桑の杖 (宮古群島・pp.155-159)
		竜宮城に案内し、帰りに杖と包みを渡す。	主人公加那は、枯木のようにしおれて死んでしまう。土にさした杖は、新芽をふきだし、大きな桑の木になった。
7	美しい女 (竜宮の乙姫)	海岸	不思議なつぼ (宮古群島・pp.160-167)
		竜宮城に案内し、帰りに宝物のつぼを渡す。	主人公マサリヤや周囲の人々はつぼの酒を飲んで若返り元気になったが、つぼが割れるともとの老人になり、重病人は死んでしまった。
8	人魚	海岸	人魚の歌 (八重山群島・pp.187-190)
		石垣島に大津波がおそってくることを知らせる。	大津波のお告げを信じなかった人々が死んでしまう。
9	厄病神	海岸	厄病神 (八重山群島・pp.208-212)
		石垣島に悪い熱病をまき散らしに来る。	主人公が島じゅうのものに病気のバイキンがまき散らされない方法を伝えて、島全員が助かった。
10	千鳥 大きな鱈	海の沖・海岸	無人島に流された男 (八重山群島・pp.217-223)
		台風におそわれた主人公に、流木があることを鳴き声で知らせる。島の海岸に送り届ける。	海で溺れずに命を助けられる。無人島から故郷に無事に帰ることができた。国王より褒美が与えられた。

まず、沖縄諸島の民話において、バルバロスたちが登場する境界の場所に注目したい。東北地方の民話で登場した場所が圧倒的に山や峠が多かったのに対して、沖縄諸島では海や海岸が目立つ。島嶼部であるので、海を境界と考えるのは当たり前と捉えられるかもしれないが、島民にとって海の存在はとてつもなく大きい。石垣島白保に暮らす奥谷麻依子氏は、家族で9年前に移住し、ワークショップスペースと宿泊施設を運営しながら、白保の村の地域行事にも積極的に参加している<sup>25</sup>。奥谷氏によると「海は私たちにとって全てであり、全部くれるし、全部とっていく」というコメントがあった。海から得られる魚介類等の恵みはもちろんだが、津波等の被害にあってきた歴史も同時に語られている。また、海に入ることにに関して、村のおじいやおばあから、「お盆に海に入ると海の向こうに連れて行かれるよ」と叱られるほど、海への信仰も厚い<sup>26</sup>。そのような背景がある中で、表の「桑の杖」「不思議なつぼ」のように、中国、ヨーロッパ、日本の本島にも広がる竜宮伝説が沖縄諸島の地域色で彩られる形で受け入れられているのも自然なことであろう<sup>27</sup>。

また、海や海岸に登場するバルバロスたちも、千鳥、月、鬼、乙姫、厄病神等、大変多様であり、沖縄諸島の地域色も出ている。例えば、表の「千鳥の歌」「無人島に流された男」に出ている千鳥であるが、沖縄では蝶や蛇と同様に、鳥の存在<sup>28</sup>も死者の化身と信じられている<sup>29</sup>。奥谷氏からも例えば、「鷺の民謡(ばすいぬとうるいぶし)が祭りや祝い事で歌われる」など、沖縄での鳥のモチーフの重要性が語られた<sup>30</sup>。多様性という意味においては、月の存在<sup>31</sup>も興味深い。それは、沖縄諸島における旧暦を大切にしたり暮らしと関連が深いと思われるからである。沖縄本島在住で沖縄の暮らしや雑穀料理に関するワークショップを開催し、神人(かみんちゅ：目に見えない世界と交信できる人)を家族に持つ家庭に嫁いだ、大城千春氏によると、「農業をするにしても、旧暦(陰暦)と、月のリズム、潮のみちひきを感じながら種をまいたり、収穫をしたりする」と語られた<sup>32</sup>。

それでは、上記の表に描かれたバルバロス<sup>33</sup>たちは、どのように登場人物たちの生と死に関わっているのだろうか。

「無人島に流された男」では主人公が台風におそわれ、荒波にのまれる中、千鳥の鳴き声を聞き、群がっているところに大きな流木があることを発見する。流木につかまり、命拾いをするようになる。また無人島から故郷の黒島に帰りたいと神に祈りを捧げたところ、海の中から大きな鱈が現れ、主人公を故郷まで運んでくれた。また、その経験によって、国王から褒美をもらうことになったという話である。この話では、登場する誰の死も描かれず、主人公が生き延びることを助け合い、無人島に一人で暮らすという苦しみからも助けられることになる。命を助ける役割を担った千鳥や、人間の能力を超えた力を発揮した鱈は、まさに神のような存在であり、全てのものに神や「いのち」を認める「万有生命信仰」をこの話からも読み取れる。神の化身となったバルバロスたちは、沖縄諸島の海という自然環境とも調和しながら、主人公を故郷に戻し、家族や親戚とのつながりを取り戻すことができるようになった。自然と調和しながら人間同士のつながりを創っていくことの象徴とも言えるだろう。この話では、バルバロスが困難を乗り越え、平和を創造していく上で欠かせない存在となっている。主人公とバルバロスが「共生み」をベースにした共生のあり方を示していると言えるだろう。

しかし、一方で、バルバロスとの関わりから、主人公が命を落とす話も描かれている。表中の「千鳥の歌」では、バルバロスとの出会いから一旦は幸福に暮らすのが、最後には命を落としてしまう主人公が描かれている。主人公は、一人息子を台風の海で亡くしたことがまだ信じられず、夕暮れになると海岸で息子を待つのが習慣となる。そこで、一羽の羽を痛めた千鳥を発見する。葉をつけ、餌をやり、元気になった千鳥に「おまえは、台風の海で亡くなった俺の魂であろう。いつまで

も一緒に暮してくれ」と話した。その後、千鳥は美しい娘となって、主人公の身の回りの世話をするようになる。しかし、娘との約束「千鳥ということは口外しないこと」をやぶってしまい、千鳥は主人公の元をはなれ、主人公は熱発して死んでしまった。自然の一部である海や神の化身である千鳥との約束を、人間が破ってしまうという対話の失敗、自然との取り決めを守れない人間、そしてその失敗から人間が命を落とすこともあることがわかる。

また、上記のように、生と死どちらか一方ではなく、両者が絡まりあいながら話が進んでいくものもある。「桑の杖」では、主人公が落し物の髪にさすかもじを拾ったところ、海岸で美しい女に出会う。その女が竜宮の乙姫ということで、一緒に竜宮城に行く。主人公が記念の品をもって島に帰ってきたが、何百年も年月が経ったことがわかる。記念の品を開いてみると、白髪の束がはいっており、しゃくにさわって投げ捨てたところ、みるみる老人となり、血の気がなくなり、死んでしまう。その代わり、主人公が土に差し込んだ杖からは、新芽がふきだし、葉をしげらせ、大きな桑の木となったという。この話からは、自然の中に現れる竜宮城の乙姫というバルバロスとの出会いから、自然と調和した形で対話を重ねいったん幸せに暮す主人公だったが、バルバロスとの約束を破り自らの命を落とす。しかし、生の象徴である、桑の木の成長という場面も描かれており、生と死が表裏一体となった世界観が描かれている。沖縄本島に暮す大城氏への聞き取りの中で、「沖縄ではあの世とこの世が身近にある」という言葉があり、「目に見えないものを見える人が多い」「先祖が見える」「沖縄戦で亡くなった霊が見える」などの話をよく聞くということであった<sup>34</sup>。沖縄諸島での生と死が近い中で日常の暮らしがあることも関連があると考えられる<sup>35</sup>。

以上のように、人間とバルバロスたちとの出会いは生死の緊張感が常に漂う。運よくお互いを生かしあう「共生み」の関係を結べたとしても、この生と死が表裏一体となったバルバロスたちとの出会いが終わるわけではない。新たな「異人」を目の前にした時、お互いを排除せずどのように平和的に共に生きる可能性を考えられるだろうか。

この中で参考になるのが、他者と共に生きようとした時に現れる「苦しみ」の感覚である。東北の民話で述べたような「痛み」の感覚は、沖縄諸島の民話では、バルバロスたちが現れた際、どちらかの死、または両者の死に結びつく話には出てくる<sup>36</sup>が、共に生きようとした時には現れない。

筆者は、全くの「異人」であるバルバロスたちと共に生きるための希望が、「共苦」をベースにした人間とバルバロスの関係の描かれ方にあり、それと同時に長期的な「共生み」の関係を結ぶために、「苦しみ」からの解放の術として「泣く」と「笑う」ことがあるのではないかと考える。

表中の民話「おほん坂」には、幼い頃に父を殺された主人公が出てくる。父の仇を討つために空手の稽古を積み、二十年間仇を探し廻っていたところから話が始まる。この話の導入にある主人公の背景を考えただけでも「苦しみ」が十分に伝わるところである。その時、首里の金城(かなぐすく)の坂(境界)を、「おほん、おほん」と苦しそうな咳をして登っている一人の老人(バルバロス)に出会う。背は弓のように曲がり、古びた着物を着ていたということで、バルバロスとして登場した老人の「苦しさ」も表現されている。主人公は、老人を気の毒に思い、老人に声をかけ、彼をおぶって坂を登り始めた。お互いに苦しい中で、主人公が老人を助ける場面は、共生の第一歩ともとれるが、まだ「苦しみ」がお互いに共鳴していないこともあり、「共苦」とはまだ言えない。その後、老人は坂の上で自らの人生の「苦しみ」を順番に主人公に告白していく。「女房にも子供にも先立たれ、こんなにおちぶれて、この年まで苦しむのも、若いときおかした罪のむくいであろう」と言われ、主人公は身寄りのない自分と老人を重ねて、一緒に暮らすことを提案する。老人は泣きながら、「ひとりで苦しんできたことを打ち明ける」と主人公に言い、「若い頃に罪もない相手を殺してしまった」

と伝えた。それが、主人公の父親であった。しかし、主人公は殺そうと思っていた父の仇である目の前の老人が、これまでの人生で十分に苦しんできたことを思い、殺そうという気持ちがなくなってしまうことに気づく。その後、この老人の告白を聞いた筑佐事(ちくさじ、現在のお巡りさん)が老人を捕らえて連れて行く後ろ姿を見ながら、主人公はわあっと泣き伏してしまう場面で話は終わる。この話は後半に入り、ようやくお互いの「苦しみ」を共有しながら、なんとか共に生きていこうとする「共生み」の関係性に変化する。また、一番の敵であり殺そうと考えていた他者を殺さずに、この世で自分も生き、憎んでいた他者も同時に同じ世界で生きようとする「苦しみ」も描かれ、バルバロスとの「共苦」の次元が現れたといえるだろう。

また、もう一点ここで注目したいのは、お互いが「苦しみ」の中で流す「涙」や「泣く」ことである。この話では、主人公とバルバロスである老人が「泣く」場面が描かれている。沖縄諸島の他の民話でも「泣く」場面が大変多い。例えば、表中の民話「千鳥の歌」でも、バルバロスである娘は最後の場面で泣き崩れ、飛び立つ千鳥の悲しそうな「鳴き声」は、「泣く」ことを連想させる。また、「熊女房」では、わが子が遠く離れていってしまうのを知った妻の熊が山上から「鳴く」場面が描かれている。これも、悲しみの果てに「泣く」様子と呼応している<sup>37</sup>。筆者は、沖縄諸島の民話において、このような主人公やバルバロスたちの「泣く」ことが、自身の「苦しみ」を自ら解放させようとしていることと関係があると考え。東北の民話では、「共生み」の関係を結ぶ際にその「痛み」が滞らないような工夫が描かれていた。例えば、「古暦と縫針」を煎じた白湯を飲んだり、「大鐘」を吊るしてならしたりするなど、「お湯」や「鐘の音」といった外部の力を借りて循環を促進しあう工夫が描かれていた。しかし、そこには依然として「痛み」は残り、民話の中の表現に現れたと言えるだろう。一方、沖縄諸島では、自分自身で身心の循環を助ける術、「痛み」を逃がす術を「泣く」ということで体得してきた背景があり、「苦しみ」を解放する過程で「痛み」の表現が無くなったのではないかと考える。

それは、沖縄の伝統的な文化の中にも見出すことができる。例えば、死者に対して近親者が声をあげて泣(哭)く、「哭き唄<sup>38</sup>」がある。琉球弧全域にみられ、声をかけることは、情けをかけることであり、死者もそれにより安心して別れていくと考えられていた。葬儀では、遺体に直接うたいかける供養歌と、死後近親者が寂しさを紛らわせるためにうたう哀惜歌に分かれており、後者の哀惜歌はまさに自身の身心の循環を助け、「痛み」を逃がす術と言えるだろう。近年、火葬の普及により、以前ほど泣かれなくなったということだが、伝統的な文化の基層として今でも受けつがれている部分もある。そして、「泣く」ことは、「笑う」ことと表裏一体となっていることが、沖縄諸島の各行事での人々の様子から窺うことができる。

石垣島白保在住の奥谷氏が、沖縄諸島ではお墓参りはしんみりと悲しいものではなく、「楽しく家族でお墓にピクニックに行く」と語った。また、白保では、地域の行事として成人式も大切にされており、村をあげて盛大に行われている。二十歳になった子どもたちが親に対してお礼を言う際に、全員その場面で「泣く」のであるが、最後は墓参りの時と同様に踊って「笑う」。それは「悲しみにけれない人々」の姿であることを語ってくれた<sup>39</sup>。

また、沖縄諸島には、悲しみに笑いを交えて表現する歌「ユングトゥ」が存在する。親の言うことを聞かず墓が流されてしまう民話「雨蛙不孝」を題材にした「雨蛙ユングトゥ」も、悲しい素材を笑いの世界に載せて表現する八重山諸島の人々の感性の一端を見ることができる<sup>40</sup>。

「泣く」ことと「笑う」ことは、その時間的な超越性と瞬間性を同時に体感できることから、人間にとってどちらも欠かせないことであることが次のように指摘されている。

「(中略) <泣き> は次々と移行する会話的文脈の <今ここ> を越えて持続する。それに対して、 <



笑いへの持続はきわめて短く、会話のある時点で笑いが生じても、数秒すればさっさと切り上げられる<sup>41)</sup>。」

上記のように、沖縄諸島では、伝統的な文化や各行事の中で、「泣く」と「笑う」ことが身の循環や自身の「痛み」を解放する術として脈々と受けつがれてきていることがわかる。バルバロスとの「共生み」の場面で、「痛み」の表現が表面的に出てこないのはこのためであろうと考える。

また、「泣く」と「笑う」こと以外に、外部の力を使って「苦しみ」や「痛み」を解放し、上手く循環させるような伝統が多く残っていることにも注目したい。例えば、民話「大蛇の精<sup>42)</sup>」とも関連のある、「ハマウリ」の行事である。「ハマウリ」は、沖縄・奄美諸島の年中行事の一つであり、「浜下り」とあてる。旧暦三月三日の行事で、沖縄ではその日若い女性が潮に手足を濡らさないと、美男に化ける蛇、アカマタの子を生むといわれた。手足を潮に濡らすことによって、不浄を祓い、健康を願うものである<sup>43)</sup>。

このように、「異人」と共にしようとした時に感じる「共苦」の次元から、自身の中で「苦しみ」を解放し循環を助ける術とともに、外部の力をかりる術も豊富な沖縄諸島の文化のあり方は、自己と他者、そして、全ての「いのち」のつながりあう宇宙の中で循環を促進しあいながら、「異人」と共に生きる長期的な「共生み」の関係の結び方を創出する有効な方法例と言えるだろう。多様な文化背景をもった人々を長期的に生かし合う「多文化共生」という関係を結べる希望が、沖縄諸島の民話から読み取れるのである。

#### 4. 日本社会における多文化共生教育への示唆

筆者はこれまでの論考で、日本の多文化共生教育の実践や研究の課題について下記の通り整理してきた。確認のため、一部を再掲する。

日本の多文化共生教育研究は、アメリカのリベラリズム(または、ある程度植民地主義を容認した形の批判的多文化主義)を前提とした理論を土台として展開されているものが多く、多文化主義と植民地主義が表裏一体となっている中で、植民地主義から根本的に脱却するという問題を抱えてきたことを、これまでの研究で明らかにしてきた。また、そのような植民地主義の思想から脱する多文化共生教育に必要なポイントを整理してきた。例えば、「多数の移民や難民がもつハイブリディティや複合的アイデンティティから「国家」「文化」「民族」といった概念を自分自身に照らし合わせながら捉え直す」「グローバル・シティにおける「搾取-被搾取」の関係性を移民や難民の視座から考えさせる」ことなどである<sup>44)</sup>。前節までに整理してきた、民話の中で表出している「いのち」の思想は、上記の植民地主義の思想から脱する際のポイントと捉えることができる。つまり、自分自身の生のあり方に向き合いながら「国家」「文化」「民族」といった概念を問うことは、多文化背景をもつ人々を哀れに思い同情したり、自分には関係ないと無関心のままでいたりするような立ち位置に揺さぶりをかける。そして、「いのち」の思想を媒介とする際に重要となるのが、東北地方の民話分析や前節の沖縄諸島の民話分析で整理してきた「苦しみ」や「痛み」といった「共苦」の思想であると考えられる。例えば、多文化共生教育を植民地主義から脱するポイント「「搾取-被搾取」の関係性を移民や難民の視座から考えさせること」ことであれば、自分は「搾取する側」かもしれないし、「搾取される側」かもしれないという、どちらであっても「苦しい」立場を体感することで、多文化背景をもつ人々がおかれた多様な立場や、自分自身とのつながりを捉え直し、両者が抱える苦しみを感ずる「共苦」の次元へと歩み寄ることができるのではないだろうか。

筆者はまた、日本の学校教育で使用されてきた教科書(中学校「社会科(公民的分野)」)や副読本(中学校「道徳」)の内容分析を、「多文化共生」の視点から行ってきたが、そこに描かれていたのは、主に自国民の優秀性であり、在日コリアンをはじめとしたさまざまな文化背景をもつ人々を理解する学習単元も含まれているものの、上記で示した「国家」「文化」「民族」などを根源的に考え、自分のアイデンティティをふりかえる点は十分とはいえなかった<sup>45</sup>。

それでは、前節で考察した沖縄諸島の民話に現れた登場人物とバルバロスたちとの関係性、つまり、お互いの「共苦」の次元から、自身の「苦しみ」を解放し循環を助ける術とともに、外部の力をかりる術も生かして、両者を生かし合う「共生み」の関係性へと発展させるような共生の仕方から、日本社会における多文化共生教育に示唆できることは何であろうか。

筆者は、日本における様々な多文化共生教育の実践に欠けているのは、東北の民話に現れていたのと同様の「共苦」の感覚ではないかと考える。この「共苦」なくして、「在日コリアンの苦難の歴史」をテーマにした授業内容は頭の理解だけに留まり、国際理解教育の一実践である「国際協力ボランティア活動」も一方的にかわいそうな人を助けるという理解に留まってしまうのではないだろうか。

現在行われている多文化共生教育の実践の中に、東北地方の民話分析の際も述べた通り、この「共苦」の感覚をまず取り戻すこと、各々がどのように取り戻せるかを各地域の文脈で具体的に考えていくこと、それが多様な文化背景をもつ人々との「いのち」を生かし合う「共生み」の関係性を結ぶる第一歩につながる。

例えば、竹内久顕(2011)が平和教育の立場から「加害者への<sup>コンパッション</sup>「共感共苦」から始める」という高校での実践を紹介しているように、「どういう条件下で人は加害者になってしまうのかを明らかにすることで、それとは異なる歴史的可能性を探ること」が、「平和な歴史をつくる主体の形成につながる」と述べている<sup>46</sup>。このような実践をヒントに、多文化共生教育でも異文化背景をもつ人々や、彼らを取り巻く人々など、多様な人々の立場での「痛み」や「共苦」をロールプレイなどで体感的に想像するとき、そこからお互いを生かし合う「共生み」の関係性を主体的に創出する授業実践につながるのではないだろうか。

そして、その上で、沖縄諸島の民話分析から特に重要なのは、「異人」と共に生きる長期的な「共生み」の関係を創出できるように、自身の中で「苦しみ」を解放し循環を助ける術とともに、外部の力をかりる術を多文化共生教育の中でいかすことであると言える。

例えば、筆者がこれまでの研究の中で重要視してきた、3つの「いのち」の視点は、多文化共生教育を実施していく上で、個人の内面的な平和と地球規模での平和の文化を創造していく力の内と外とのバランスをとっていくものであり、民話の中で描かれていた自身の「苦しみ」を開放してく術と呼応するものであると考えることができる。「いのち」の視点のうちの一つのテーマ「自分の身体」で、具体的な実践例にあげた方法には下記のようなものがあつた<sup>47</sup>。

<テーマの詳細>

世界各地域で発展してきた心・身体のバランスのとり方や感情・ストレスのコントロールの仕方を体感する。世界の人々が積み重ねてきたそのような知恵を体得し、自分自身の中に平和や安心を生みだせるようにする。

<具体例>

- ・息を整える。
- ・触れる、体をほぐす、緊張をほぐす、身心を整える(世界で発達してきたホリスティックセラピー、日本との比較をしながら)。

このような「いのち」の視点は、民話の中で述べられてきた「苦しみ」を逃がす術の具体例とも言え、「息を整える」ことは「笑い」や「泣く」といった現象と同様に、自身の力を活用したものであり、「触れる」ことは外部の力を活用したものとと言えるだろう。このような具体例を、各地域の取組や状況に適合した形で取り込んでいくことで、より持続的な「共生み」の関係性を結べる多文化共生教育プログラムとなっていくだろう。

## 5. おわりに

本論では、筆者がこれまでの論考で検討してきた日本の伝統的な思想の中での「多文化共生」と「いのち」の視点とをつなぐ考え方をもとにして、その考え方が長年民衆の間に伝えられてきた民話や伝説の中にどのように表出しているのかを、沖縄諸島の民話に登場する「異人」を対象にして考察した。そして、日本社会における多文化共生教育に示唆できる点を提示した。

沖縄諸島の民話では、全くの「異人」であるバルバロスたちと共に生きるための希望が、「共苦」をベースにした人間とバルバロスの関係の描かれ方にあり、それと同時に長期的な「共生み」の関係を結ぶために、「苦しみ」からの解放の術として「泣く」と「笑う」ことがあることが明らかになった。多様な文化背景をもつ人々を長期的に生かし合う「多文化共生」という関係を結べる希望が、沖縄諸島の民話から読み取れた。現在行われている多文化共生教育の実践の中に、東北地方の民話分析の際も述べた通り、「共苦」の感覚をまず取り戻すこと、各々がどのように取り戻せるかを各地域の文脈で具体的に考えていくこと、それが多様な文化背景をもつ人々との「いのち」を生かし合う「共生み」の関係性を結べる第一歩につながる。その上で、沖縄諸島の民話分析から特に重要なのは、「異人」と共に生きる長期的な「共生み」の関係を創出できるように、自身の中で「苦しみ」を解放し循環を助ける術とともに、外部の力をかりる術を多文化共生教育の中でいかすことであると言える。

なお、上記の方向性を生かしたより具体的なプログラムの詳細については、本論では十分に検討することができなかつたので、今後の研究課題としたい。

【付記】本論は、平成28・29年度公益財団法人上廣倫理財団研究助成金によって支援して頂いた研究成果の一部である。

## 【註】

- 1 孫美幸(2013)「いのちの視点を取り込んだ多文化共生授業における子どもの意識変容 - 在日コリアンへの偏見や無関心を乗り越えるために -」、『ホリスティック教育研究第16号』pp.54-68
- 2 孫美幸(2016)「韓国民話における「異人」への眼差し～韓国社会の多文化教育のあり方を考えるために」、『ホリスティック教育研究第19号』pp.1-13、孫美幸(2017b)「伝承民話集『聴耳草子』における「異人」たちと「多文化共生」～日本社会における多文化共生教育のあり方を考えるために」、『ホリスティック教育研究第20号』pp.49-63
- 3 佐藤弘夫(2014)「神・人・死者 - 日本列島における多文化共生の伝統」、シンポジウム「人文学の新しい可能性」、『北海学園大学人文論集第57号』pp.148-157
- 4 金容儀(2014)「『遠野物語』における人間と妖怪のエコロジー」石井正己編(2014)『国際化時代と

『遠野物語』』pp.53-71(三弥井書店)

- 5 R.A. モース・赤坂憲雄編(2012)『世界の中の柳田国男』pp.308-311(藤原書店)
- 6 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡(2016)「河童の民話における土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究」『実践政策学第2巻1号』pp.45-46
- 7 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡(2016)前掲書 pp.45-52 では、民話における「河童」を取り上げ、土木技術者を「不浄」とする常民の差別意識の存在が、現今における土木を「不浄」とする生活意識と通底していることを指摘した。その他にも、中尾聡史・宮川愛由・藤井聡(2015)「日本における土木に対する否定的意識に関する民俗学的研究」『実践政策学第1巻1号』pp.37-52 も同じ系統の研究である。
- 8 小栗有子(2015)「ポスト DESD に残された社会教育としての課題 - 環境教育史論が提起する問題を中心にして」日本社会教育学会編『社会教育としての ESD』pp.39-40(東洋館出版社)
- 9 上田正昭(2008)『日本人“魂”の起源』pp.5-7(情報センター出版局)
- 10 伊波南哲編(2015)『[新版]日本の民話 11 沖縄の民話』(未来社)
- 11 福田晃・山里純一・村上美登志(2000)『琉球の伝承文化を歩く 1 八重山・石垣島の伝説・昔話(一) - 大浜・宮良・白保 - 』(三弥井書店)、狩俣恵一・丸山顕徳(2003)『琉球の伝承文化を歩く 2 西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』(三弥井書店)、岩瀬博・高橋一郎・松浪久子(2006)『琉球の伝承文化を歩く 3 喜界島の伝説・昔話』(三弥井書店)。
- 12 本論における「異人」に対する整理や分析方法は、韓国の民話分析を行った際のものと同様である(孫美幸(2016)前掲書 参照)。
- 13 小松和彦(1995)『異人論 - 民俗社会の心性』pp.13-14(筑摩書房)
- 14 赤坂憲雄(1992)『異人論序説』pp.247-255(筑摩書房)
- 15 赤坂憲雄(1992)前掲書 pp.15-21
- 16 赤坂は、「境外の民としてのバルバロス」の例として、「未開人・野蛮人・エゾ・アイヌ・土蜘蛛・隼人・山人・鬼・河童など」をあげている(赤坂憲雄(1992)前掲書 pp.15-21)。
- 17 赤坂憲雄(1992)前掲書 pp.248-251
- 18 梅原猛は、「草木国土悉皆成仏」の思想について「「草木国土悉皆成仏」は天台宗と真言宗の統合で生まれた思想です。しかも、鎌倉新仏教、法然・親鸞の浄土仏教、栄西・道元の禅仏教、および日蓮の法華仏教、このような仏教の前提になっているのです。とすればこの思想はまさに日本仏教の共通の前提になっているのです。」と説明する(梅原猛(2013)『人類哲学へ』p. 26 (NTT 出版株式会社))。
- 19 上田正昭(2013)『森と神と日本人』pp.20-21(藤原書店)
- 20 上田正昭(2013)前掲書 pp.42-43
- 21 上田正昭(2013)前掲書 pp.18-19
- 22 古事記の「神生みと伊耶那美神の神避り」の最後の文章に、「おほよそ伊耶那岐・伊耶那美の二の神、共に生みたまへる嶋老拾肆嶋、また神 参 拾 伍 の神。」と記載されている(中村啓信＝訳注(2009)『新版 古事記 現代語訳付き』pp.28-30(角川文庫))。
- 23 上田正昭(2013)前掲書 pp.59-60・303-304
- 24 日本における人と自然の密接なつながりや循環関係の重要性を、日本の国生み神話と中国の洪水神話の比較から考察している研究もある(佐々木高弘(2014)『シリーズ妖怪文化の民俗地理 3 神話の風景』pp.217-221(古今書院))。

- 25 2017年5月15日、石垣島白保「ル・ロチュス・ブルー」にて行ったインタビュー。ICレコーダー等はおかずにインフォーマルな形で行ったため、その際につけたフィールドノートをもとに記述しながら、本人確認を後日とっている。
- 26 真下美弥子は「海に囲まれた島々では、自分の島と外界・異界とが常に明確に意識される。そのような世界観は、神々が祭りのときに海のかなたなるニライカナイから来訪すると信じられ、祭りの中で演じられるさまに表されている」と、沖縄における海の信仰について説明する。真下によると、「沖縄本島北部のウンジャミ、宮古島のンナフカ祭祀、八重山諸島のアンガマやマユンガナシなどのように、海のかなたから神々や祖霊を迎える例は多い」と説明される(真下美弥子(1996)「鳥獣草木譚の自然」、福田晃・岩瀬博編『民話の原風景 - 南島の伝承世界 - 』p.144・154(世界思想社))
- 27 松浪久子は、東アジアの七夕を背景として広く伝わる「天人女房」の伝承から、喜界島での例をあげ、「喜界島では、天人女房は実在とされ、さまざまな天神女房譚が伝承されている」と述べる(松浪久子(1996)「南島説話の民俗社会 - 喜界島の民間説話を通して」、福田晃・岩瀬博編 前掲書 pp.180-185)。また、岩瀬博は、日本本土と沖縄での話型を比較しながら、「子育幽霊」を例にあげ、「南島では死者の現世訪問・活躍譚や、葬制儀礼と並行する生者の死から生への蘇生譚などが多種多様に語られ、その豊かな伝承の中で語り継がれてきた」と述べ、「単に本土、南島で対照とすると同一話型として処理されるものでも、その内実は異なっている」と、沖縄で多様な要素を集合させ、美しく創造されたものであることを説明している(岩瀬博(1996)「本格昔話の成立」、福田晃・岩瀬博編 前掲書 pp.95-101)。他にも、丸山顕徳は、「沖縄の民話というのは中東から東南アジアへ来て南太平洋を通過してから沖縄まで来ている。また、日本本土からだんだん南下していることもわかる。一部中国大陸からも流れ込んでいる」と説明し、「日本の古層」を大切にしながらも「世界の文化を取り入れている」と、沖縄の民話をもつ多様性と重層性を指摘している(丸山顕徳(2017)「沖縄の神話・伝説 - 本土からの南下と環太平洋からの影響」、花園大学人権教育研究センター編『花園大学人権論集 24 孤立社会からの脱出 - 始めの一步を踏み出すために』pp.156-159(批評社))。
- 28 真下美弥子は沖縄における鳥の存在について、「翼をもち外界と島とを自在に往還できる鳥は特別な力をもつものと受けとめられ、他界から来訪する祖霊の姿に重ねられたり、神の使いとされたりした。(中略)鳥が特別な霊力をもつものであり、神の意志を体現するものとして受けとめられていた」と説明する(真下美弥子(1996)「鳥獣草木譚の自然」、福田晃・岩瀬博編 前掲書 pp.141-144)。
- 29 塩月亮子(2008)「死」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克成編『沖縄民俗辞典』p.234(吉川弘文館)
- 30 2017年5月15日のフィールドノートより。
- 31 渡邊欣雄は沖縄での月の存在について「沖縄方言でチチ、トートーなどといい、古来崇拜対象であると同時に、その満ち欠けから時期・時刻を知る重要な目安とされてきた。(中略)民間では、月見、月拝み、御月お祭り(ウチチウマチー)などと称して、旧八月十五日に各地各様の盛大な祭りが催されている」と説明する(渡邊欣雄(2008)「月」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克成編 前掲書 pp.346-347)。
- 32 2017年5月15日のフィールドノートより。
- 33 民話の中には、琉球から見た中国や朝鮮半島の存在について記述のある民話がいくつか含まれ

ている。例えば、「大虎退治」(伊波南哲編(2015)『[新版]日本の民話 11 沖縄の民話』pp.118-122(未来社))では、琉球を訪れた支那の役人を恐れる民衆の姿が描かれている。「琉球人のぶんざいで、大国の役人に向かって、無礼であるぞ」というセリフからも、中国が強大な国であることや琉球を弱い立場に見ていることがわかる。また、「頓智小僧」(伊波南哲編(2015)前掲書 pp.128-135)では、琉球に難題を何度ももちかける薩摩の国のことが書かれており、沖縄諸島と日本本島との関係の難しさがわかる。このような沖縄諸島と近隣の国々との関係は、沖縄のことわざに「唐は差し傘、大和は馬の蹄、沖縄は針先(とうやさしかさ、やまとうやうまぬちまぐ、うちなあやはあいさち)」とあるように、唐の強大さ、敵わない大和、弱小の沖縄の関係性を上手く言い表している(仲井真元楷(1982)『沖縄ことわざ事典』p.200(月間沖縄社))。そして、「大和粗品、唐詠(やまとうしょうべい、とうあられえ)」ということわざから「中国品はあつらえ物のように上等」ということで、優れた技術をもち、尊敬する存在であることもわかる(仲井真元楷(1982)前掲書 p.296)。「異人」に対する見方が、尊敬や恐怖、差別の感情が入り混じったものであることは、柳田国男、折口信夫など日本を代表する民俗学の研究者がすでに指摘してきたことである。

34 2017年5月15日のフィールドノートより。

35 丸山顕徳は、沖縄の四季、空間、時間、人の一生が「円環的」と指摘し、「子どもが生まれて大人になって、じいさんばあさんになって、その後どうなるか」というと、神さまになる。そして子どもに戻って生まれてくる。霊魂が循環している」と説明する(丸山顕徳(2017)「沖縄の神話・伝説 - 本土からの南下と環太平洋からの影響」、花園大学人権教育研究センター編前掲書 pp.160-161)。

36 例えば、「兄の蛇退治」では、妹が大蛇に血を吸われて死んでいる、そしてバルバロスとしての蛇も刀で兄に退治されてしまい、「痛み」は共に生きることにつながらない(福田晃・山里純一・村上美登志編(2000)『八重山・石垣島の伝説・昔話(一)琉球の伝承文化を歩く 1』pp.61-64(三弥井書店))。

37 狩俣恵一・丸山顕徳編(2003)『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話 琉球の伝承文化を歩く 2』pp.154-156(三弥井書店)

38 酒井正子(2008)「哭き唄」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克成編『沖縄民俗辞典』p.374(吉川弘文館)

39 2017年5月15日のフィールドノートより。

40 福田晃・山里純一・村上美登志編(2000)前掲書 pp.146-149

41 谷泰(2009)「笑い」日本文化人類学会編『文化人類学事典』pp.358-369(丸善株式会社)

42 伊波南哲編(2015)前掲書 pp.136-138

43 津波高志(2008)「ハマウリ」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克成編『沖縄民俗辞典』pp.428-429(吉川弘文館)

44 孫美幸(2010)「日本と韓国の中学校における「多文化共生教育」のあり方 - 平和教育の包括的な展開を目指して」(立命館大学大学院社会学研究科 2009年度博士論文) pp.165-169

45 孫美幸(2010)前掲書 pp.55-57・100-103を参照。本論では、筆者が実践研究を行ってきた京都市の事例を確認し、「在日コリアンの苦難の歴史を学ぶ、朝鮮半島の文化について体験しながら学ぶ、民族学校と交流する、ゲストスピーカーを招くなど、一見多様に見える実践例も二項対立的な「~民族としての自覚」を高めるという視点に留まっている」ことを指摘した。また、

「総合的な学習の時間」の柱の一つである国際理解教育の実践についても言及した。「英会話を中心にした授業、外国人留学生との交流、国際協力ボランティア活動」などは、「文化本質主義的見解が見え隠れし、一言語内の複数性や多様性に目を向けることが難しい」ことや、「豊かな国に住む自分は貧しい発展途上国の人々を助けることができる」という優越した前提に無意識に立っている」ことなどの課題を指摘した(孫美幸(2006)「多元的価値の共存をめざした教育：アフリカの民族と文化の多様性から学ぶ」、『国際文化会館会報第17巻第1号』pp.13-28も併せて参照)。

- 46 竹内久頭(2011)「第8章 再び「4つの乖離」」竹内久頭編著『平和教育を問い直す - 次世代への批判的継承』pp.105-108(法律文化社)
- 47 孫美幸(2017a)『日本と韓国における多文化共生教育の新たな地平 包括的な平和教育からホリスティックな展開へ』pp.199-212(ナカニシヤ出版)

### 【参考文献】

- 赤坂憲雄(1992)『異人論序説』(筑摩書房)
- 石井正己編(2014)『国際化時代と『遠野物語』』(三弥井書店)
- 伊波南哲編(2015)『[新版]日本の民話11 沖縄の民話』(未来社)
- 岩瀬博・高橋一郎・松浪久子(2006)『琉球の伝承文化を歩く3 喜界島の伝説・昔話』(三弥井書店)
- 上田正昭(2008)『日本人“魂”の起源』(情報センター出版局)
- 上田正昭(2013)『森と神と日本人』(藤原書店)
- 梅原猛(2013)『人類哲学へ』(NTT出版株式会社)
- 狩俣恵一・丸山顕徳編(2003)『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話 琉球の伝承文化を歩く2』(三弥井書店)
- 狩俣恵一・丸山顕徳(2003)『琉球の伝承文化を歩く2 西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』(三弥井書店)
- 小松和彦(1995)『異人論 - 民俗社会の心性』(筑摩書房)
- 佐々木高弘(2014)『シリーズ妖怪文化の民俗地理3 神話の風景』(古今書院)
- 佐藤弘夫(2014)「神・人・死者 - 日本列島における多文化共生の伝統」、シンポジウム「人文学の新しい可能性」、『北海学園大学人文論集第57号』
- 孫美幸(2006)「多元的価値の共存をめざした教育：アフリカの民族と文化の多様性から学ぶ」、『国際文化会館会報第17巻第1号』
- 孫美幸(2010)「日本と韓国の中学校における「多文化共生教育」のあり方 - 平和教育の包括的な展開を目指して」(立命館大学大学院社会学研究科2009年度博士論文)
- 孫美幸(2013)「いのちの視点を取り込んだ多文化共生授業における子どもの意識変容 - 在日コリアンへの偏見や無関心を乗り越えるために -」、『ホリスティック教育研究第16号』
- 孫美幸(2016)「韓国民話における「異人」への眼差し～韓国社会の多文化教育のあり方を考えるために」、『ホリスティック教育研究第19号』
- 孫美幸(2017a)『日本と韓国における多文化共生教育の新たな地平 包括的な平和教育からホリスティックな展開へ』(ナカニシヤ出版)
- 孫美幸(2017b)「伝承民話集『聴耳草子』における「異人」と「多文化共生」～日本社会における多文化共生教育のあり方を考えるために」、『ホリスティック教育研究第20号』

- 竹内久顕編著(2011)『平和教育を問い直す - 次世代への批判的継承』(法律文化社)
- 仲井真元楷(1982)『沖縄ことわざ事典』(月間沖縄社)
- 中尾聡史・宮川愛由・藤井聡(2015)「日本における土木に対する否定的意識に関する民俗学的研究」  
『実践政策学第1巻1号』
- 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡(2016)「河童の民話における土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究」  
『実践政策学第2巻1号』
- 中村啓信＝訳注(2009)『新版 古事記 現代語訳付き』(角川文庫)
- 日本社会教育学会編(2015)『社会教育としてのESD』(東洋館出版社)
- 日本文化人類学会編(2009)『文化人類学事典』(丸善株式会社)
- 花園大学人権教育研究センター編(2017)『花園大学人権論集24 孤立社会からの脱出 - 始めの一步を踏み出すために』(批評社)
- 福田晃・岩瀬博編(1996)『民話の原風景 - 南島の伝承世界 - 』(世界思想社)
- 福田晃・山里純一・村上美登志編(2000)『八重山・石垣島の伝説・昔話(一)琉球の伝承文化を歩く1』  
(三弥井書店)
- 福田晃・山里純一・村上美登志(2000)『琉球の伝承文化を歩く1 八重山・石垣島の伝説・昔話(一) - 大浜・宮良・白保 - 』(三弥井書店)
- モース, R.A.・赤坂憲雄編(2012)『世界の中の柳田国男』(藤原書店)
- 渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克成編(2008)『沖縄民俗辞典』(吉川弘文館)